

5月27日(日) 13:15~13:55 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

---

ウィリアム・ホガースの銅版画  
—その造形における諧謔性と諷刺性について—

東京藝術大学 大庭 朋子  
OBA Tomoko

---

ウィリアム・ホガース（1697～1764）は銅版画というメディアによって英國の社会や風俗を道徳的観点から鋭い観察眼で諷刺的に活写し、極めて人気のあった画家である。とりわけその名声を決定付けたのは、独創的な物語主題による連作群である。作品の性質からして、従来の研究においては、ポールソンによる総合的研究（1965、1971、1991～93）をはじめ、社会史的、文化史的、そして文学史的背景を踏まえた主題内容の検討や、芸術家の精神性の分析に力点を置くものが主流を占めていた。これらの先行研究によって作品の多層的な意味構造と芸術家の諷刺精神は解明されても、これまで造形に関する議論は十分ではなかった。ホガースの様式的側面と図像源泉を詳細に検証したアンタルの研究（1962）はこの意味で特筆に値する。銅版画の造形的側面に関する踏み込んだ研究については、連作の構図におけるパースペクティヴ表現を問題としたマルティネ（1997）の論考を除けば、ほとんど試みられていない。

そこで本発表では、ホガース版画のコンポジションや画面にくり返し登場するモティーフに着目して、先行作例や同時代の批評的言説を検討しつつ、その銅版画作品に通底する造形的特質の考察を行い、ホガースの視覚的諷刺表現の本質を明らかにしたい。

ホガースの構図においては、背景を形成する建築モティーフの表現が画面に深い奥行きを与えるのに対し、複数の主要人物像は近視点から水平視で捉えられ、画面前景にフリーズ状に表現される傾向にある。また、その構図でさらに特徴的なのは、意外性のある斜めの構図を数多く採用している点だが、こうした構図において彼は、求心的なパースペクティヴの消失点や消失軸を意識的に、主題の中心上ではなく、変則的に画面端や副次的人物像の上に配している。つまりホガースは、画面構成を決定付ける前景の平面的な人物表現と奥行きを生み出す背景という二つの造形要素を乖離させたり、斜めの要素や観者の期待を裏切る造形的逸脱を積極的に画面に導入したりすることで、視覚的な諧謔性に富んだ画面を創出しているのである。

こうした造形的諧謔性はまた、三次元と二次元の境界を曖昧にする画中画や窓枠で枠取られた情景描写、文字の記されたモティーフ、そして動きの瞬間を捉えたモティーフの表現を多用することによっても追求されている。

ホガースの版画にはさらに、特徴的な画面最前景端を菱形の一部のように区切る斜線を作り出す影の表現、もしくはそれに類するモティーフが頻繁に登場する。こうしたルプソワールとしての機能を帯びた造形表現は、カロや17世紀オランダの版画作例を踏まえたものと考えられる。先行研究によても度々指摘されてきた観者に劇場空間を強く想起させるホガースの枠取りのある版画画面においてそのような表現は、画中の空間を分断し、さらなる劇場空間を生み出すものと解釈できる。

ホガースの銅版画は、造形的なアイロニー、婉曲表現として、観者の視線を惑わす視覚的諧謔性に満ちた、劇中劇的効果をはらんだ二重のコンポジションを創造することで、同時代の現実社会に立脚した物語絵を、現実を超えた普遍的な諷刺表現へと昇華させているのである。